

自ら問いを創出する子を育む社会科の授業づくり

—「問いの階層モデル」を用いた実践の分析を通して—

教育実践高度化専攻 教科指導重点コース 言語・社会科学系
(社会)

富樫 優太

近年、教師が子どもに課した「学習課題」ではなく、教師と子どもが一緒に作り上げた「問い(学習問題)」を軸にした社会科の実践が多く見られるようになってきている。しかし、問い作りを子どもに完全に任せた授業の研究はまだまだ発展途上である。

本研究の目的は、子どもが自ら問うことに重点を置きながら、主体的・対話的で深い学びを実現できる社会科の授業展開を明らかにすることである。まず、「問いの階層モデル」を用いて授業展開を構想し、実践を行う。そして、実践の中で生まれた子どもたちの問いから、変容と発展の在り方を、量的調査と質的調査で検証した。その結果、問い続けるためには訓練によって問い方を学ぶ必要があることや、導入の種類による問いの変化の仕方、深い学びにつながる質の高い問いを生むための手だてについて明らかになった。これらの結果をまとめ、「子どもたちが自ら問う社会科の授業づくりのためのポイント」を表でまとめ、提案した。